

浜崎あゆみ研究

——「A Song for ××」に見られる親の子どもへの
不適切なかかわりの影響——

千 葉 喜 久 也

はじめに

最近、離婚が増加している。離婚は夫婦の問題であると同時に子どもの問題でもある。しかし、現実には親の都合を子どもへ押し付けた離婚が増加し、これにより傷つく子どもが増加している。いわば大人の都合を子どもに押し付け「子ども不在」の離婚が増加している。¹⁾ このような現象は離婚の先進国といわれる米国でも日常化しており、大人の都合で離婚に巻き込まれた子どもの多くが、その後の生活に大きな影響を受けていると指摘されている。

わが国においては、これまで離婚については社会的にタブー視する傾向があって、話題にしたり、口に出すことを控える傾向があった。また、「子どもは未熟な者」「子は親の所有物」との考えも影響して、子どもに十分説明し理解させる努力を怠ってきた。このため子どもが、親の姿勢や態度に疑問や不信を抱きながら生活することになる。不安を抱えた子どもは、その成長過程の中で、心のバランスをとるため理性的に対処しようとする行動が見られる。反面、不適応状態となって攻撃的になったり、自分の感情を抑圧するなどの行動を示す場合も見られる。子ども一人ひとりの人権を尊重する規範がない社会では、常に子どもは親に振り回され子どもの不幸が発生する。離婚に限らず親自身の子どもの気づきや、自分のとった行動への疑問がない状態では、こうした不適切な親のかかわり、すなわち子ども虐待が繰り返される土壌が社会に潜在しているといえる。²⁾

現在、社会が変わり人の意識も変わったといわれている。しかし、子どもが「親」³⁾に求める安心は、親の愛情でしか満たすことができない。子どもは親の愛情で安心を得て人を信頼する心を育み、自分に自信を持つことができるようになる。社会が大きく変わっても、子どもが親に求めている「愛情」は不変である。

今回取り上げるミュージシャン・浜崎あゆみは、自ら書き・歌う詞の中に親の不適切なかかわり(=虐待)を受けたことの体験を綴っている。現在、彼女が歌う歌は中高生を始めとする25歳までの若者を中心に絶大なる支持を得ている。しかし、彼女の歌う歌は心惹かれるラブソングではない。そこには、幼少時に経験した親の離婚により受けた自分の辛かった過去を振り返り、その過去と向き合う姿がある。そして、古い記憶を呼び起こしながら「自分」を見つけようとする

気持ちを感じ取ることができる。そこに多くの若者が共感し、大きな支持を生んでいる背景を読み取ることができる。親の不適切なかかわりを受けた側の心境と、それが後に彼女に与えた影響について、彼女の詞に焦点をあてながら、その背景と意味について考察を試みることにする。

1 浜崎あゆみの歌詞の特徴

浜崎あゆみの楽曲は、歌詞はすべて本人の自作である。実際に楽曲を歌う「歌手・アーティスト」と、作詞・作曲・編曲・演出などを総合的に担う「プロデューサー」が一体となって展開する「プロデュース型」のCDセールスが主力となっている現在、自分で書いた詞を自分で歌う浜崎の存在は特徴的に写る（楽曲「M」ではついに作曲まで自ら行ない、音楽的な多才さが評価された）。

支持層の声でよくあるのが、「あゆは作家みたいに自分で詞を書いている。だからあゆの曲は、あゆが書いた小説みたい」というものである。人が用意したものを人の言うままに歌う「プロデュース型」にはない魅力が、浜崎にはあるといえる。浜崎によって書かれた詞の分析に入る前に、まずは浜崎の詞の特徴ともいえる点について触れてみる。

浜崎の詞には、英語表現はもちろんカタカナ英語も一切登場しない。これは画期的であるといえる。（注・「メッセージ」「ゴール」「ストーリー」「SOS」などもはや日本語としても一般化した言葉、「MARIA」などの人名、「la la la……」「wow wow……」などのスキヤット表記のみ、アルファベットやカタカナを使っている）

浜崎の主な支持層の中学生～20代半ばまでの世代は、英語表現や英詞についてほとんど抵抗がない世代であり、むしろ海外アーティストのCDを「耳障りがよい」「気分がのってくる」という理由から好むケースも非常に多い。小学生のころから「洋楽」に日常的に触れており、歌詞の意味がわからなくても洋楽を聴いて楽しむことが普通になっている。

それに加え、多くの日本人アーティストが響きのカッコよさやメロディに乗せやすいとの理由から英語表現や英詞を多用するようになり、楽曲の中における詞の存在がどんどん軽いものになってしまう傾向が強まった。つまり、「聞き心地のいいサビのメロディさえあれば、そこにどんな歌詞がのっていても違いがない、歌詞にどんな言葉があるかは、その曲を好きになるかどうかでは二次的・三次的要素である」という風潮が一般的になったのである。（実際、響きがいいだけの英語表現は、日本語表現に訳してみるとまるで意味をなさず、かえって滑稽なものになってしまう場合も多い。）

しかし、浜崎の曲は歌詞が日本語であることにより「詞も耳に残る」という現象が起きる。いくら英語表現に慣れてるとはいえ、意味の把握スピードは母国語のそれにはかなわない。そして聞く者は詞を「理解」するのである。それまでの「曲調主導・歌詞軽視」から、「曲調主導・歌詞重視」へ。この点から考えても、この曲が日本のPOP音楽に変化をもたらしたといえるだろう。

耳に残り、そして理解できる日本語の歌詞があり、そこに並ぶ言葉は「20歳前後の女性歌手」としてこちらが予測する以上のものがある。そしてそれらはすべて浜崎本人によって書かれたもので、等身大の自分が表現されている。決して暑苦しくなく、また白けてもいない。気づいてみると、自分（聞き手）と同じようなことを感じ、同じようなことを思っている。それが、親しみやすさにつながる。曲調が良く、しかも理解できる歌詞がある。浜崎あゆみの曲を考える上で、ベースとなる魅力はここにあるといえよう。

浜崎の歌詞の内容に関して言えば、全般を通して挙げられる特徴は「閉塞感」かもしれない。事実、浜崎をあまり好まない人々にその理由を聞くと、「歌詞が暗い」「歌詞が難しい」「軽い気持ちで聞けない」などの理由が挙げられる。「閉塞感」、たとえば歌詞の「息苦しさ」などは、これまでの女性アーティストの歌詞の中には表れなかった特徴である。

かつて若者に多大な影響力をもっていた松任谷由美の歌の世界は、「恋愛のスタイル」の提示であった。「遠距離恋愛」や「純愛」あるいは「不倫」などの恋愛スタイルを提示し続けた。たとえ失恋の悲しさを歌った歌でも、そこに新しさをドンドン付け加えていくことで、長い間“恋愛の教祖”とまで言われて支持を集めていた（松任谷由美の凋落は、CD購買層と自分との年齢ギャップを埋められなくなったからといわれる）。

松任谷由美に代わる形で「恋愛の教祖」の座に着いたドリカム（Dreams Come True）のメインボーカル・吉田美和は、松任谷由美よりもずっとわかりやすい言葉で恋愛を語り、「愛を叫ぼう、愛を呼ぼう」と直接的な表現で呼びかけた。

同じ「恋愛」テーマにした楽曲でも、浜崎の手によるものは実に異彩を放っている。例えば楽曲「appears」では

恋人達は とても幸せそうに
手をつないで歩いているからね
まるで全てのことが 上手くいってるかのように 見えるよね
真実（ほんとう）はふたりしか知らない

と、ずいぶん冷めた語り口で恋人同士を語る。

そもそも、浜崎の楽曲には純粹なラブソングと言えるものが少ない。これは、歌謡曲・J-POPのほとんどがラブソングを占める日本の音楽市場の中でも、稀有な存在と言って間違いない。この時点で、松任谷由美やドリカムとは全く違う世界観を作っている。そのキーワードの一つが「閉塞感」である。浜崎の楽曲の中でラブソングの部類に入るいくつかのものも、やはり「appears」の冷めた見方のように、「閉塞感」を感じるようなものが多い。

浜崎の楽曲のもう一つの特徴は、自分自身をテーマにした作品が多いことだ。「パーソナル・ソング」と言われるこのタイプの曲は、詞の独自性が高まる半面、聴くものの共感を得にくいとい

うリスクがある（聴く者の共感を得るなら、使い古された単語を羅列するラブソングが一番有効である）。

実際、浜崎の詞は彼女自身の生い立ちに深く関連するものが多く、やはりそこに「閉塞感」を感じ、けっしてハッピーなものではない。それなのに、中高生をはじめ多くの支持を得ているのは何故か。

浜崎の曲の魅力とは、「挫折の自認と、それに立ち向かう力強さ」と定義できる。このようなテーマを主としてきた女性アーティストはこれまで存在しなかったし（唯一、中島みゆきはそうかもしれないが）、その表現方法は独特である。その新たな魅力こそが、浜崎が支持されてる理由でもある。

それでは、彼女の歌から感じられる「閉塞感」はどこからくるのか。彼女の「挫折」とは何か。そして「力強さ」とは。

2 「A Song for ××」の分析

浜崎の詞を考える上で、各メディアなどでも必ず取り上げられ、また多くのファンの間でも、「あゆがあゆ自身のことを歌った曲」として知られている「A Song for ××」という曲は、避けて通れない曲である。「××」として伏せられている、曲の対象者は誰なのか。疑問形で終わる多くのフレーズの意味は。まずはこの詞の意味について分析を行うことにする。

「A Song for ××」の歌詞には、「心理的虐待」を受けた側に現れる特徴的なものが見られる。

どうして泣いているの
 どうして迷っているの
 どうして立ち止まるの
 ねえ 教えて

いつから大人になる
 いつまで子供でいいの
 どこから走ってきて
 ねえ どこまで走るの

3つの疑問文が続き、「ねえ教えて」と一区切り。この疑問は果たして誰に当てられたものだろうか。インタビューを参考にする限り、この詩を書いた時点での浜崎自身が、幼少のころの自分自身に対して話しかけているようにも読み取れる。また幼少のころの自分自身に話しかけるこ

とで、勇気をもって過去の自分に向き合うことを決めた「決意表明」として詞の冒頭にあるとも考えられる。

その後の「いつから大人になる いつまで子供でいいの」という疑問は、多くの人が一度は経験したことがある疑問だろう。しかし、その答えは誰も教えてくれないし、誰も決めてくれない(法律的解釈はこの際当てはまらない)。仮に「いつから大人で、いつまで子どもか?」という問いに答えを求めるとしたら、それは自分のケースを振り返ることで唯一可能かもしれない。大人になって「自分のこと」として、この問いの答えを探ろうとした時、過去の自分をはじめて客観化するのかもしれない。

居場所がなかった 見つからなかった
未来には期待できるのか分からずに

「自分の居場所がない」という状態での不安は、現代社会においても多くみられる。

例えばいわゆる“いじめ”を受けている子どもの場合は、学校に自分のいる場所がなくなり、やがて不登校や引きこもりなどのケースに至る。これはいまや子どもだけでなく大人にも見られる現象である。陰湿ないじめや理不尽な人事・処分が横行する職場などで、自分の居場所を失っている人は多い。またこれとは別に、長引く不況下でリストラされ、職場という居場所そのものを失ってしまうケースも増えている。

そんな「自分の居場所がない」人たちにとって、唯一の居場所にできるのが家庭である。「家族とは社会の最小単位」などとよく言われる。時代と社会の変化によって、家族の形態もずいぶん様変わりしてきているのは事実だ。しかし、「基本単位」としての家族は、いまだ強い求心力を持っていることは否定できない。そんな「最後のよりどころ」とも言える家庭で、幼少のうちに自分の居場所を無くしてしまったら……。

いつも強い子だねって言われ続けてた
泣かないで偉いねって褒められたりしてたりしたよ
そんな言葉ひとつも望んでなかった
だから 解らないフリをしていた

真に心を休められる場ではなくなってしまった「家庭」で、「強い子」「泣かない子」「えらい子」を演じて誉められていた。しかし、そんな誉め言葉は一つも望んではいなかった。本当に望んでいたのは、自分の居場所だった。でも、誉め言葉を拒むようなことをするわけにはいかない。このギャップを埋めるためにとった行動は「解らないフリ」だった。幼少のころから、こんな悲しい行動を取らざるを得なかったのである。

どうして笑ってるの
 どうしてそばにいるの
 どうして離れてくの
 ねえ 教えて
 いつから強くなった
 いつから弱さ感じた
 いつまで待ってれば
 解り合える日が来る

笑ったり、そばにいてくれた誰かが、理由もなく離れていってしまうことを嘆いている。この「誰か」を父親と想定することもできる。その父親との別れを通し、いつからか（望んだわけでもないのに）「強く」なり、その一方で（正直に言えば）「弱さ」を痛感した自分がいた。

それでも求めたのは、「誰か」と解り合うことだった。しかし「いつまで待ってれば」にあるように、その日が来ることを「待つ」ことしかできず、こちらから何か行動を取れるわけでもなかった。そのいら立ちも文章からうかがえる。

もう日が昇るね そろそろ行かなきゃ
 いつまでも同じ所には いられない

「陽が昇る」とは象徴表現で、「陽が昇る→新しい日が始まる→再出発」という意味に理解できる。「待つ」だけでいら立っていた「同じ所」から、新しい場所へと歩き出す決意がみられる。「いかなきゃ」という言葉には、自分の意志と反する行動という意味と同時に、自分を奮い立たせるためのストイックさが感じられる。ここで「自律」し、自ら成長を求めている。

「待つ」ことをやめ、自ら能動的な行動に出る。このポジティブさが力強く写り、聴くものを勇気づける。

人を信じる事って いつか裏切られ
 はねつけられる事と同じとっていたよ
 あの頃そんな力どこにもなかった
 きっと 色んなこと知り過ぎていた

この詞の中で最も痛々しい部分とも言える。「信じること＝裏切られること はねつけられること」こんな悲劇的な解釈をするようになってしまった原因は、やはり「すごく信頼してて、もうきっとずっと一緒にいる人たちなんだ」（インタビューより）と思っていた父親が、「騙して出て

行った」(インタビューより)からだろうか。「騙す」「裏切る」など父親の態度(心理的虐待)が、ネガティブな思考を浜崎に植え付けてしまったのかも知れない。

「あの頃そんな力どこにもなかった」。かつての自分が無力であり、何もできなかったことを振り返っている。「色んなこと」=「良い子に振る舞う術や、解らないフリをすること」などを身につけてしまっていたが故に、無力であったのかも知れない。前節にある「自律」の力を持ち合わせた今を、過去と比較して再確認しているのだろうか。

いつも強い子だねって言われ続けてた
泣かないで偉いねって褒められたりしていたよ
そんな風に周りが言えば言う程に
笑うことさえ苦痛になってた

「そんな風に周りが言えば言う程に、笑うことさえ苦痛になってた」。「心理的虐待」を受けて傷ついている自分と、「良い子」と評価される自分とのギャップに悩み、苦しんでいる姿が浮かぶ。

一人きりで生まれて 一人きりで生きて行く
きっとそんな毎日が当たり前と思ってた

事実上、人間は多くが「一人で生まれる」が、その先は多くの人と出会って生きていく。つまり「一人で生まれても、多くの人と共に生きていく」のである。では、なぜ「一人で生きていく」と歌うのだろうか？ おそらく、人間が生まれて初めて出会う「共に生きていく人」の一人の肉親と、悲劇的な別れをしているからではないだろうか。それゆえの悲痛なまでの覚悟が、「一人きりで生きていく」となったのではないだろうか。

しかし最後に「思ってた」と終わることに注目したい。これは「……思っていた」のあとに「しかし……」という言葉が続くことを予感させる。「一人で生きていく毎日が当たり前ではない……」と思ひ直すような表現となっており、心境の変化がうかがえる。これは誰かとの出会いであったり、あるいはこれまでの自分の気持ちや心境の変化を感じ取ることができる。

歌詞の最終行として唐突な感はあるが、それゆえに強い存在感があり、いろいろな想像を聴く者に抱かせる。それが「希望的」あるいは「ポジティブ」な結論を予測させる点が、聴く者へのメッセージ性をより高めている。

さて「A Song for ××」の発音されない「××」の部分だが、ここで予想を立ててみたい。まず最も考えやすいのは「××=父親」ということである。仮に父親だとすれば、「心理的虐待」を自分に与えたことの怒りをぶつけているわけではない。

むしろ、その虐待を受けながらも、成長し、自立(自律)できるようになった自分を誇らしげ

に見せているように感じる。また「××」が父親であるという大きな理由の一つが、CD 付属の歌詞カードにある言葉である。曲タイトルの表記の下に、浜崎の自筆と思われる文字で「覚えているのは、あなたの小さく頼りない背中」と書き込みがある。「あなた＝父親」であれば、自立(自律)した浜崎には、過去を振り返って記憶にある父親の背中が、「小さく、頼りない」ものでしかなかった。この時点で、幼少時に受けた「心理的虐待」からは精神的にも解放されたのである。「××」の候補として考えられる次の例は、「自分」である。「ネガティブだった自分」に宛てたパーソナル・ソングであるとの理解も成り立つ。過去の自分がネガティブであるなら、そこにメッセージを送っている今の自分はポジティブと言える。実の父親から「心理的虐待」を受け、長年それに悩みつづけた浜崎は、自分がポジティブに生まれ変わるという能動的な手段をもって、心が癒されて行ったのである。

3 父への思い

さて、「A Song for ××」が、ネガティブだった自分へのパーソナルソングであったと考えられるのに対し、次に考える「teddy bear」は、父親へ向けての歌ととらえられる。詞の中の「あなた」は父親で、まさに父親との別れの場面を歌ったものだ。また詞に登場する「相変わらずその背中が小さく頼りなくて」の部分は、「A Song for ××」の歌詞カードにある書き込みと酷似したフレーズである。

「teddy bear」

あなたは昔言いました
目覚めれば枕元には
ステキなプレゼントが
置いてあるよと
髪を撫でながら

相変わらずその背中が
小さく頼りなくて
だけど楽しい話なら
笑い合えてた

それなのに人はどうして
同じような誤ち
あと何度繰り返したら

後悔できるの

思い出している

葬ったハズの

いつかの夜

あなたは昔言いました

目覚めれば枕元には

ステキなプレゼントが

置いてあるよと

髪を撫でながら

私は期待に弾む胸

抱えながら眠りにつきました

やがて訪れる夜明けを

心待ちにして

目覚めた私の枕元

大きなクマのぬいぐるみいました

隣にいるはずのあなたの

姿と引き換えに

あなたは昔言いました

目覚めれば枕元には

ステキなプレゼントが

置いてあるよと

髪を撫でながら

まるで一つの物語のような語り口で、父との別れが語られている。実話であるかどうかは別としても、リアリティのある歌詞である。

まずこの歌詞のなかで注目したいのは、次の箇所だ。

それなのに人はどうして

同じような過ち

あと何度繰り返したら
後悔できるの

このフレーズの終わりの部分、「後悔できるの」という終わり方。これが「罰があたるの」「苦しむの」などの望みではなく、「後悔できるの」であるのはなぜか。ここに、自分に対して「心理的虐待」を振るってきた相手が、自分の父親であるということへの「迷い」「戸惑い」が見られる。つまり、できることなら父親に「後悔」し、「反省」して欲しい思いを感じ取ることができる。自分に対してひどい仕打ちをした人ながら、やはり自分の父親に罰があたったり苦しんだりすることを心から望むようなことはしたくない。わが子にしてきた「態度」でわが子が傷ついたことに気づき、反省・後悔して欲しいと願うのである。

実の親による虐待の深刻な一面がここにある。いくら自分に危害を与えようと、その対象は自分の父親・母親である。子どもにしてみれば、どんな親でもその親と仲良くしたいと願い、親から良く思われたいと思っている。虐待されているなど「信じたくない」という気持ちが強い。しかも、それを口に出して相談できる相手など、子どものうちは見当たらない。また他人には簡単に言えない心の葛藤もあって、やがて口を閉ざすようになり、心まで閉ざすようになってしまう。「teddy bear」は、この葛藤を物語化して表現したものであり、浜崎自身の心の叫びであるとも考えられる。そして叫ぶ相手を明確に「父」とすることで、「後悔」を求めていると理解できる。

思い出している
葬ったハズの
いつかの夜

「忘れた」「棄てた」などの表現よりも、より強い意志が感じられる「葬った」という言葉を用いての、“記憶との決別”。しかし、自分の意志とは裏腹に、勝手に「思い出している」いつかの夜のこと。物語調で綴られたこの詞には、どんな意味が込められているのか。“記憶との決別”つまり過去の自分と向き合って辛い記憶を吐き出し、新しい一歩を歩み始める準備をしているとも理解できる。

辛い別れを経験した後、それをどのように消化するかということは、ケアの最重要ポイントの一つである。多くの場合、辛い記憶を自分の心の中に閉じ込めてしまい、それを持ちつづけたまま悶々と日々を過ごしてしまうか、または閉じ込めたものをどうしたらよいか分からずにひたすら我慢し続けることになる。これでは何の解決にもならず、また時間が解決してくれる問題でもない。

このようなケースのケアで必要なのは、まず溜め込んでいるものを吐き出させることである。苦しい記憶や自分の感情を吐露させ、その感情を共感的に受け止めてもらえた時、人は安心し落ち

着きを取り戻し元気を回復していくのである。苦しい胸のうちを吐き出すことで気持ちの中のできた安心の気持ち（スペース）こそ、新しい何かを始めるときの土台となる気持ちでもある。まずアウトプットさせ、そのあとにインプットする。このプロセスを踏んだ成功例として、浜崎を見ることもできる。

彼女の場合、自らの体験を詞に表して自分で歌うことでアウトプットを行った。もちろん、過去の記憶を思い起こして言葉にするのは相当な苦しみと戸惑いがあったと推測される。しかしそれをあえて行い、気持ちや感情を吐き出したことで、次のステップへの準備を手にすることができたのである。「A Song for ××」にも見られた「自己の再認識→自己解放」という過程が、詳細は異なりながらこの歌でも実践されている。

4 浜崎あゆみの支持される理由

浜崎の2つの作品の詞に見られる「心理的虐待」について、これまで述べてきた。幼児期に受けた“心理的虐待”が、浜崎の詞の世界に深く関連していると見ることができる。

では、浜崎のCDを買って浜崎の曲を聞いている支持層は、浜崎の詞の世界をどのように認識し、どのように共感しているのだろうか。

浜崎が幼児期に受けた“虐待”の辛い体験と似たような思いを経験している部分での共感や感情移入が関係していると受け止めることができる。浜崎と似た境遇にある若者が、自分の代弁者として浜崎を支持している面はあるだろう。

しかし、浜崎の支持層すべてが浜崎と同じような幼児期の境遇だったわけでは決していない。ではなぜ浜崎に共感するのか。それは、現代社会が抱えている閉塞感と不安の社会現象として見ることができる。これまで親が子どもに言ってきた「努力すれば報われるよ」「いい学校に入っている会社に勤めれば、いい生活ができるよ」という台詞は、現代社会ではもはや通用しなくなった。かつて同じように親（祖父母）から言われ、そのとおりにして頑張ってきた親自身が、決して幸せになっていないからである。第一次ベビーブーム世代にあたる親たちは、やっとの思いで就職し家庭を顧みることなく、そこで会社人間として働きつづけた。しかし今日の不況の嵐の中で、その手に入れた就職先でさえ、倒産やリストラなどであっけなく解雇されている。こうした大人の多くが、人生は「我慢と努力」だと信じて頑張ってきた人たちである。しかし明日への希望を失い戸惑い、家庭に自分の居場所を求めて戻ろうとしたとき、そこには父親の居場所を確保することは難しくなっていた。

こんな親の姿を見てきた子どもは、親にいくら「努力しろ」「ガンバレ」と言われても、白々しく聞こえるだけになってしまう。そんな親の言う言葉を信用できなくなると同時に、では親の言うままの自分ではなく“本来の自分”の姿に気づき、それを探し始める。その過程の中で出会うのが、同じように“本来の自分”を探して、それを詩や歌で表現した浜崎あゆみなのだ。

浜崎がとった「自分の過去を知ること、自分の道を見つける」という作業は、実に辛く苦しいものである。しかし、不幸な過去にも堂々と向き合い、その忌まわしきものを外に吐き出すことで、やっと新しいもの“本来の自分”を見つけることができたのである。

あるがままの自分を受け入れるには、ありのままの自分と向き合うことが必要である。浜崎は「A Song for ××」でも「teddy bear」でもかつての不幸な自分を認め、吐き出すことで新しい一歩を踏み出すことができたのである。

浜崎あゆみが多くの方の共感を得る理由として、もう一つの理由が考えられる。それは浜崎自身の「生きる姿勢」である。たとえ困難な事柄でも、自ら問題解決をしようとする浜崎の前向きでポジティブな姿勢こそが、支持層に強く働きかけていると考えられる。

幼児期からの苦しい現実を強いられてきた浜崎は、その苦しみから逃れる手段として、まず自分自身が力強くポジティブ生きることを選んだ。この力強さを手に入れることで、辛い自分の過去とも堂々と対峙し、直視することを可能にした。周りが自分を幸せにしてくれるのではなく、自分の幸せは自分自身で得ることを認識し実行したのである。そして究極ともいえる「自分の強さ」を手に入れ、このように歌う。

幸せの基準は いつも
 自分のものさしで
 決めてきたから
 (「Trauma」より)

浜崎の支持層はこの浜崎の力強さに、時に驚き、時に学び、時に共感しながら彼女の詞の世界を受け入れてゆく。浜崎にとっては「虐待の記憶」から抜け出す手段だったこの力強さが、そのまま浜崎の魅力になっているのである。それ故、虐待の経験などない者でも、浜崎の詞に惹かれることになる。

この「力強さ」への憧れは、同姓だけではない。一般社会で働いている男性サラリーマンや父親世代にも支持層が広がっていることを考えると、「不安な時代」である現代に、支持されるべくして支持されているのが浜崎の詞の世界なのかもしれない。この影響力は、浜崎のアイドル的要素が薄まるにつれて増していくことが予想でき、今後さらに強くなるであろう。

幼い頃の虐待の経験を、“自ら”克服し、現在では勇気を与える側に立った浜崎あゆみ。今後、彼女はどんなものを表現していくのか。興味は尽きない。

なお、講義「浜崎あゆみ」の後、学生諸君に「浜崎あゆみ」について感想を書いていただいた。終わりに学生諸君の感想を紹介して本稿を終える。

〈感想〉

・浜崎あゆみの歌詞の『愛する』という意味は、みんなが言っているような単なる恋愛ではなく

て、もっと深い愛を言っているんだなあと思いました。

- ・今、彼女が若者に共感を得ているのは、彼女が歌の詩の中に、ありのままの自分をさらけ出しているからだと思う。自分の見せたくない部分を、他人に見せることは本当になかなかできないことだと思う。それを歌うという形で表現した彼女を、私はとても尊敬する。
- ・確かに、浜崎あゆみの歌詞には、どこか孤独、辛さ、悲しさを感じるものではあるけれど、なかなか理解できない世界観があった。
- ・いつも「あゆ」をテレビで見ていて、服装やメイクはまるで人形のように、無機質な感じがするのにも、歌を歌い出すと、とても人間味を感じ、すごいなあと思っていました。彼女の生い立ちを知り、その理由がわかったような気がします。
- ・以前までは、浜崎あゆみのことを『かわいくて何でも手に入っているなあ』としか思っていませんでした。でもだんだん歌詞や彼女のことを知っていくうちに、違うことに気がきました。自分の過去や思いを隠さずに伝えること、そして前向きに生きていこうとする姿がそこにはありました。私も過去に辛い経験があり、自分を否定してばかりで、その思いを吹っ切る努力をしていなかったように思います。これからは、彼女と同じように私も前向きに生きようと思いません。
- ・浜崎あゆみの詩には、幸せなことばかり書かれたものではないことに気付かされました。前向きなものにも、どこかさめた目で、客観的な感じがする。それは、彼女の実体験に基づいていて、幸せと一言言っても、その裏にある落とし穴のようなものがあることを知っているからだろう。同時に、彼女自身が自分に言い聞かせているのではとも思えた。
- ・浜崎あゆみの曲を聞くと、胸が苦しくなるような感じは前からあった。自分が彼女に共感できる部分があって、それを認めるより、見てみぬふりをした方が楽に生きられるような気がしていた。人から望まれる自分を作って、いい子として生きていく方が、人とぶつかることもないし、いいことだと思っていた。でも、ちょっと自分のことを見つめ直そうと思った。
- ・華やかな世界にいて、一見チャラチャラしているように見える彼女のイメージが変わったような気がする。みんなに自分は強いんだと思ってもらわなきゃならない辛さを、外見でカモフラージュしていたのかと思うと、なんだか切なく思えた。笑ってこのような歌詞を歌えるようになるには、様々な葛藤を乗り越えてきたんだと思うと尊敬してしまう。
- ・その人の過去を知るということは、その人の重荷と一緒に背負うということだと思っていたので、私は浜崎あゆみの歌詞をじっくりと聞くことはありませんでした。若い世代で『共感できる』と彼女を支持している子どもたちの何人が、本当に理解できているのか疑問に思います。歌詞に込められた彼女の思いは、受け止めるには大きすぎます。幼少のころに思うことってまっすぐで辛いですね。
- ・自分の痛い部分、辛いことや悲しかったことを表に出すのって辛いことだと思う。それを詩にして歌い上げる彼女はスゴイと思う。誰もが弱い部分を持っているってことを教えてもらった

気がする。

- ・今回、浜崎あゆみの曲を聞いて、私とは違う人生、ものすごく辛い人生を送ってきたはずなのに、共感できる場所があり驚いた。自分をありのままに表現することにより、自分は一人ではないと悟ったのだと思う。ありのままを表現することは辛いことであるし、難しいことであると思う。私自身、自分をありのままに出すことは、未だに抵抗がある。でも、それを乗り越えることによって私自身も変わる気がした時間であった。私も心から信じられる人を見つけたいし、そういう人になりたい。

注

- 1) 私は離婚を決して否定するものではない。一度しかない人生を諦めることなく、やり直すことは大切なことである。しかし今日の離婚の中に親の役割や責任を果たさない我がままな離婚や、大人の勝手な都合での離婚が増加している。親は、離婚したとしても子どもが成人に達するまで責任が伴うことを自覚することが必要である。
- 2) 子ども虐待の定義については、子どもの側からの定義づけが重要であり、親の意図にはかかわりなく判断することが重要である。子どもが成長する過程で、その発達がゆがめられることが子どもにとって不適切なかわりといえる。そしてこうした大人の不適切なかわりも身体的な暴力と同じように子どもへの「虐待」として理解することが重要である。
- 3) 子どもが最初に体験する人間関係が親子の関係である。子どもは受動的に親を受け入れ親子関係を通じて、さまざまなことを学習する。親子関係は子どもの現在の行動を規定するだけでなく、子どもの人格形成に大きな影響を与える。

参 考 文 献

- 「浜崎あゆみ」 月刊ロッキング・オン・ジャパン 4月号 2001年4月 株式会社ロッキング・オン発行
- 「浜崎あゆみ」 ガールポップ2001 2001年4月 株式会社ソニー・マガジズ発行
- 「浜崎あゆみストーリーあゆ・み・えっくすI」 2000年 アートブック本の森発行
- 「児童福祉論」 千葉喜久也 2002年4月 東北福祉大学
- 「思春期～子ども相談の心」 千葉喜久也 2002年10月 中央法規